

クリスティン（元カトリック教徒 アメリカ合 国）（パ ト 1 / 2）

:

明:元キリスト教徒の女性が したキリスト教の非 理性と、ユダヤ教への 心。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: クリスティン

日 06 Dec 2009

集日 12 Dec 2009

私の宗教への探求は、私が15, 16 の高校の に始まりました。私は、私が友 である
と 思っていた いグル プの人々と付き合っていました。やがて彼らが け犬であること
に 付きました。私は彼らの方向性と、それが好ましくない方に向いていることを悟っ
たのです。私は将来の自分の成功がこれらの人たちのいかなる影 によっても されたく
はなかった。自らを彼らから切り しました。当初私は友 もなく一人だったので、
大 でした。私は、自分自身と共にある何かと自分の人生の基 となり ることの出来る何
か...人ではなく、 して私の将来を破 しない何かを探し始めました。自然と、私は神を
探索するようになりました。けれど神とは か、何が真 かを することは容易ではありま
せんでした。とにかく一体何が真 なのか?! これが宗教を探し始めた の私の最初の で
した。

.私の家族には、多くの宗教的 がありました。私の家族にはユダヤ教と数 のキリスト教
があり、そして今やイスラ ムがあります。アルハムドリッラ （全ての称 が神にありま
すように）。

私の父と母が 婚した 、彼らは子供を育てるためにどの信仰を ぶか める必要があると感
じました。彼らにとってカトリック教会が本当に唯一の 肢(私たちの町は人口600人ほ
ど)だったので、2人ともカトリックに改宗し、私と私の 妹もカトリック教徒として育て
ました。私の家族の改宗の を通してさかのぼってみると、

それらは全て利便性のための改宗のように思われます。彼らが本当に神を探していたとは思えませんが、ただ目的 成の手段として宗教を っていたのです。 去のこれら全ての 化の も、宗教は私の母、父、 妹または私にとって、 して最も重要なことではありませんでした。何かあるとしても、クリスマスとイ スタ の期 に教会で かける家族であつたくらいのことでしょう。私はいつも宗教が何か自分の生活から れたものだと感じていて、

1 のうち6日は生活のために、そして1日は教会のために、それもまれな 会に教会へ行くのでした。言い えると私は神自身と、そして日々その教えに沿ってどのように生きるかの自 がなかったのです。私は以下の事柄を含むある のカトリックの を受け入れることが出来ませんでした。

1) 司祭への告白:

私は、どうして人 を介さないでただ神に告白することが出来ないのか、とっていました。

2) “完璧な” 法王- 言者でもないただの人 が、どうして完璧であるのでしょうか?! 3) 人崇 -

これは最初の戒律の直接的侵害ではないのでしょうか? 14年の 制的な日曜学校の出席の でさえ、これらとその他の で得た答えは“君はただ信仰を持たなければいけないのだ!!”というものだけでした。 かが私にそう言ったから信仰を持たなければならないとでも言うのでしょうか? 私は信仰が 理に える真 と答えに基づくべきだと思い、その答えのいくつかを したくなりました。

私は や友人、その他 かの真 は求めていませんでした。私は神の真 を求めていたのです。私は自分の抱いていた全ての考えを心と魂で信じていたので、それが自分には真 であってほしいと思いました。そして自分の の答えを探すのであれば、客 的な思考で探すべきだと 心し、 物を み始めたのです...

私はまず、キリスト教は自分の宗教ではないと めました。キリスト教と 人的に何かあつたわけではありませんが、特に を んだ に、その宗教には多くの矛盾が含まれている

ことをしたからです。には、私がつけた矛盾や何の意味もなさないことが数多く存在していたので、私は事自分が彼らにしたり付けようとしたりさえしたことをずかしく感じたほどだったのです。

私の家族の何人かはユダヤ教徒だったので、私はユダヤ教も研究し始めました。私はそこに答えがあるかもしれないと思いました。それで一年ほどユダヤ教にすることを、深く掘り下げて研究したのです！私は日み、何かを学ぼうとしました(私はまだ正ユダヤ教の合法的な食品の律をえています！)。私はへ行き、ユダヤ教にすべての本を借り、2か月のにそこにあった情をべ上げました。またユダヤ教の礼堂へ行き、ユダヤ人と町の近くでし、インターネットではユダヤ教の全律法とその注解の集成本をみました。友人のユダヤ人の一人が、イスラエルから私をすることさえあったのです。私は自分が探していたものをつけたのかもしれないと思っていました。しかしユダヤ教の礼堂へ行き、私の改宗を正式にり行うためにラビに会うはずだった日、私はずさりしました。私は正直、あの日何が私の外出を阻んだのか分かりません。私はドアから出ようとしたが立ち止まってり、座りこんだのです。私は、走ろうとするけれども全てがスロモションであるようなの中にいるようでした。私はラビがそこにいて私を待っているのを知っていましたが、さえもしませんでした。また彼の方も私にをませんでした。何かが足りなかったのです...

ユダヤ教も私の求める答えではなかったということを知った、私は(からの大きなプレッシャにより)キリスト教にもう一度とりかかってみようと思いました。先に述べた通り、何年もの日曜学校の的知が良い下地にはなっていましたが、私はそのような知のに潜む真を探すことにより大きな心がありました。その全ての美しさは何で、その保障はどこにあって、そしてそれをどのように理的に受け入れられるのか？キリスト教を真に考えるようなことはあっても、カトリックはその外にありました。私は自分の町のルテル教会、ペンテコステ教会、モルモン教会、特な宗派には属していない教会など、その他全てのキリスト教会に足をびました。それでも私は、探していた答えをつけられませんでした！！私をそこかられさせたのは彼らの境ではなく、不快な宗派の矛盾でした。私は正しい道が1つだけであることを信じていましたが、そうでなければどうして“正しい”宗派をぶことなどは出来ませんでした。れみ深く慈悲深い神が

人にこのような 肢を与えるのは、私にとって不公平かつ不可能である以外の何ものでもありませんでした。こうして私は途方にくれました...

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/70>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。